

鳥取県医師会報

MONTHLY JOURNAL OF TOTTORI MEDICAL ASSOCIATION



平成26年5月15日発行(毎月1回15日発行)
昭和60年11月28日 第三種郵便物認可
ISSN 0915-3489

公益社団法人 鳥取県医師会 会長 魚 谷 純
平成26年度鳥取県医師会春季医学会学会長 山陰労災病院 院長 大 野 耕 策

平成26年度鳥取県医師会春季医学会 (日本医師会生涯教育講座)

標記の春季医学会を下記のとおり開催致しますので、ご案内申し上げます。
会員各位始め、多数の方々にご参集頂きますようお願い申し上げます。

期日 平成26年 6月8日(日)

場所 鳥取県西部医師会館
米子市久米町136番地 TEL0859-34-6251

日程 開会・挨拶 ● 9:30
一般演題 ● 9:35~11:41
特別講演 ● 11:50~12:50
「三大肝炎と肝癌」
鳥取大学医学部統合内科医学講座
機能病態内科学(消化器内科)
教授 村 脇 義 和 先生
閉 会 ● 12:50

*一般演題 14題

*日本医師会生涯教育講座

取得単位 3.0単位

取得カリキュラムコード

2 継続的な学習と臨床能力の保持 13 地域医療 15 臨床問題解決のプロセス

27 黄疸 43 動悸 81 終末期のケア

*特別講演は「日本消化器病学会専門医更新3単位」となります。

*このプログラムは当日ご持参下さい。

公益社団法人 鳥取県医師会医学会

プログラム

開会・挨拶 9:30 公益社団法人 鳥取県医師会会長 魚谷 純
学会長 大野 耕策 (山陰労災病院 院長)

一般演題 (口演7分, 質疑2分)

1. 医学教育 9:35~9:44 座長 高見 徹 (日南病院)

1) 地域で育てる—西部医師会の学生教育への取り組み—

米子市 辻田耳鼻咽喉科医院 辻田 哲朗

2. 循環器疾患 9:44~10:11 座長 石田 寿一 (石田内科循環器科医院)

2) 虚血性心筋症による心室細動患者に対し, カテーテルアブレーションを行い治癒した1例

山陰労災病院 循環器科 森下 孝臣 他

3) 大動脈弁生体弁置換術後2年で弁狭窄を来した1例

山陰労災病院 循環器科 網崎 良佑 他

4) CKD-G5D (透析患者) のBNP値の検討

鳥取市 吉野・三宅ステーションクリニック 吉野 保之 他

3. 消化器疾患 10:11~10:29 座長 堤 貴司 (堤消化器・内科クリニック)

5) マイコプラズマとの重感染が疑われたサイトメガロウイルス性肝炎の1例

米子医療センター 消化器内科 上田 直樹 他

6) 腹腔鏡下手術9年後に発症したポートサイトヘルニアの1例

済生会境港総合病院 外科 星野 和義 他

4. 代謝・内分泌疾患 10:29~10:47 座長 村上 功 (村上内科クリニック)

7) 肥満を伴った若年性劇症1型糖尿病の1例

済生会境港総合病院 内科 木下 博司 他

8) 地方都市の健診受診者における30年間の男性痛風頻度の経年推移

鳥取赤十字病院 検査科 塩 宏

5. 寄生虫疾患 10:47~11:05 座長 矢崎 誠一 (ふれあいクリニックやざき)

9) 8年間移動性皮下腫瘍が出没し, 血清学的検査にて診断した顎口虫症の1例

博愛病院 内科 永原 蘭 他

10) 内視鏡的に虫体を摘出した肝蛭症の1例

山陰労災病院 消化器内科 角田 宏明 他

6. 血液・免疫疾患 11:05~11:23 座長 川谷 俊夫 (かわたに医院)

11) 肺炎, 敗血症よりDICを生じた症例

老人保健施設ふたば・新生病院 (長野県) 内科 杉山 将洋

12) Castleman病類似型IgG4関連疾患の1例

鳥取県立中央病院 総合診療科, 血液内科 橋本 由徳 他

7. 在宅医療・介護 11:23~11:41 座長 寶意 規嗣 (宝意内科医院)

13) 老健入所死亡例における性差

米子市 真誠会セントラルクリニック 中下 英之助 他

14) 鳥取県西部医師会の「在宅医療」の取り組み 現状と課題

鳥取県西部医師会 野坂 美仁

特別講演 11:50~12:50 座長 大野 耕策 (山陰労災病院院長)

「三大肝炎と肝癌」

鳥取大学医学部統合内科医学講座・機能病態内科学 (消化器内科)

教授 村脇 義和 先生

一 般 演 題

1. 医学教育 9:35~9:44 座長 高見 徹 (日南病院)

1) 地域で育てる ―西部医師会の学生教育への取り組み―

米子市 辻田耳鼻咽喉科医院 ^{つじた} 辻田 ^{てつろう} 哲朗

西部医師会では鳥取大学医学部学生1年を「早期体験ボランティア」の一環として、4年を「地域医療体験」として各医療機関で受け入れて学生の実習に当たっており、地域医療を実践している現場の立場から医学生の教育の一翼を担っている。「早期体験ボランティア」は鳥取大学医学部健康政策医学講座が主体となり、平成25年は31医療機関で2日間、医学科1年生を受け入れた。「地域医療体験」は鳥取大学地域医療学講座が主体となり、鳥取県全体の医療機関を対象とされたが西部では25医療機関で4日間、医学科4年生を受け入れた。どちらの企画も学生たちに地域に根差した医療に興味と理解をもたせ、また全人的な医療人の育成を目的としている。この現場での体験を通して学生が医療について視野を広げて、将来の目指す医師象を描く手がかりとなれば幸いである。

2. 循環器疾患 9:44~10:11 座長 石田 寿一 (石田内科循環器科医院)

2) 虚血性心筋症による心室細動患者に対し、カテーテルアブレーションを行い治癒した1例

山陰労災病院循環器科 ^{もりした} 森下 ^{たかおみ} 孝臣 遠藤 哲 水田栄之助
足立 正光 尾崎 就一 太田原 顕
笠原 尚

症例は70歳代男性。主訴は胸痛。2014年1月初めから短時間の胸痛を自覚。近医で心電図異常を指摘され当院受診。虚血性心筋症と判断、心不全治療を行った。第5病日、Torsades de Pointesおよび心室細動を頻発したため、冠動脈造影施行。冠動脈ステント治療を行い、挿管人工呼吸、大動脈内バルーンポンピングおよび経皮的心肺補助を行った。その後、抗不整脈薬投与を行ったが不整脈コントロール困難で、心室頻拍頻発したので第10病日に緊急カテーテルアブレーション施行。アブレーションカテーテルのみで左室内をマッピングし、左室中隔前方でpre potentialを認める部位から通電を行ったところ期外収縮は消失し以後再発しなくなった。その後、抗不整脈薬減量しても心室期外収縮、Torsades de Pointesの再発も認めていない。興味深い症例と考え報告する。

3) 大動脈弁生体弁置換術後2年で弁狭窄を来した1例

山陰労災病院循環器科	網崎 良佑	水田栄之助	森下 孝臣
	足立 正光	尾崎 就一	太田原 顕
	笠原 尚	遠藤 哲	
同 心臓血管外科	小野 公誉	黒田 弘明	

症例：77歳男性。大動脈弁置換術（生体弁）術後約2年経過した頃から労作時胸部絞扼感が出現。労作性狭心症を疑い冠動脈造影を施行されたが特に異常所見を認めなかった。冠動脈造影約1か月後、突然の意識消失にて当院緊急入院。来院時身体所見にて収縮期心雑音が聴取され、また経胸壁心エコー検査にて重症大動脈弁狭窄症を認めた。人工弁機能不全と診断し、機械弁による大動脈弁再置換術を施行した。摘出された生体弁の病理学的所見では、弁輪・弁葉全体に線維性パンプス形成を認め、これらが弁可動性低下の原因と考えられた。考察：われわれは術後2年という非常に早期にパンプスによる人工弁機能不全を来した重症大動脈弁狭窄症の1例を経験した。人工弁機能不全の早期発見において、本症例のように早期に人工弁機能不全をきたす症例があることを念頭に置き、定期的な心雑音の聴取および心エコー検査が重要であると考えられた。

4) CKD-G5D（透析患者）のBNP値の検討

鳥取市 吉野・三宅ステーションクリニック	吉野 保之	中村 勇夫	三宅 茂樹
鳥取赤十字病院循環器科	小坂 博基		
鳥取市 宍戸医院	宍戸 英俊		

社会の高齢化で心不全患者が増加している。CKD5Dの死因の第1位は心不全で、対策に心血管病のスクリーニング（以下スクリ）が推奨されている。われわれは2009年から一次スクリを循環器クリニック、二次を病院で行っているが、受診者は半数程度である。近年、BNPが心血管病の予後に関するとの報告がみられる。そこで、当院患者のBNP値と予後を検討した。方法：2009年のスクリ73名のBNP、ANPの高値群（中央値BNP \geq 230, ANP \geq 65pg/ml）と低値群の2013年末の予後を調べた。結果：死亡は22名で生存期間は高値群で有意（ $p < 0.0026$ ）に短く、死因は低値群に比べ心血管病が有意（ $p < 0.03$ ）に高率であった。考察とまとめ：BNPとANPに関しては、ANPは不整脈や体液量の変化に影響され、BNPより心不全の重症度に合せた上昇が小さくBNPの利用が多い。透析患者の予後に、BNPは年齢、血清Albに次いで重要とされ、450pg/ml, 560pg/ml, 以上などで予後不良と報告されている。今回、BNP高値群で予後が不良であったことから、二次スクリを200pg/ml以上で行うのが妥当と考えられた。

3. 消化器疾患 10:11~10:29 座長 堤 貴司 (堤消化器・内科クリニック)

5) マイコプラズマとの重感染が疑われたサイトメガロウイルス性肝炎の1例

国立病院機構 米子医療センター消化器内科 ^{うえた} 上田 ^{なおき} 直樹 藤井 政至 香田 正晴
松永 佳子 山本 哲夫
同 血液腫瘍内科 但馬 史人

症例は19歳男性。発熱、咳嗽を主訴に他病院受診。血液検査にて肝機能障害、異形リンパ球増多を認め、血液悪性腫瘍否定のために当院血液腫瘍内科に紹介入院となった。紹介元のマイコプラズマIgM抗体は320倍と上昇を認めた。入院時AST561、ALT631と肝機能障害を認め、その後AST1266、ALT548と悪化を認めたが、その後急速に改善した。PTは保たれ、急性肝炎中等症であった。B型、C型肝炎ウイルスマーカーは陰性で、EBVは感染既往パターン、CMVのみIgM陽性であった。高度の肝機能障害の原因として、マイコプラズマとCMVの重感染が疑われ、若干の文献的考察とともに、報告する。

6) 腹腔鏡下手術9年後に発症したポートサイトヘルニアの1例

済生会境港総合病院外科 ^{ほしの} 星野 ^{かずよし} 和義 玉井 伸幸 丸山 茂樹
同 内科 佐々木祐一郎

症例は80歳代男性で、平成16年、胃癌、上行結腸癌、直腸癌にて腹腔鏡補助下幽門側胃切除、右半結腸切除、前方切除術を受けた。その後、イレウスにて3回入院治療を受けた。平成25年、腹痛、嘔吐が出現し、4回目のイレウスの診断にて入院した。保存的治療にて軽快せず、手術を施行した。開腹すると、左下腹部のポート刺入部に小腸が入り込んでおり、周囲の小腸が屈曲していた。トライツ靭帯より65cm肛門側の空腸を20cm切除した後、ヘルニアを修復した。術後イレウス症状は消失した。ポートサイトヘルニアは術後早期に発症することが多いが、晩期に発症することもあり、注意が必要である。自験例は、ドレーン挿入部のヘルニアであり、ドレーンはポート孔を縫縮し挿入するか、筋膜を閉鎖し別部位から挿入することも考慮すべきと思われた。

4. 代謝・内分泌疾患 10:29~10:47 座長 村上 功 (村上内科クリニック)

7) 肥満を伴った若年性劇症1型糖尿病の1例

済生会境港総合病院糖尿病内科 ^{きのした} 木下 ^{ひろし} 博司
山陰労災病院糖尿病・代謝内科 塩地 英希

症例：20歳代男性。主訴：発熱、下痢、嘔吐。現病歴：生来健康な患者。2013年1月下旬発熱と下痢を自覚。症状が数日間持続し口渇、多尿、嘔吐が出現したため当院救急外来受診。随時血糖529mg/dL、尿ケトン3+、動脈血pH 7.128であり糖尿病ケトアシドーシスとして入院となった。経過：HbA1cは6.0%であったがグルカゴン負荷試験では血中CPR 0.03/0.06ng/ml とほぼ枯渇していた。抗GAD抗体、抗IA-2抗体は陰性であったがHLA DR4-DQ4が認められており、経過からも劇症型1型糖尿病と診断した。

肥満を伴う劇症1型糖尿病はまれであるが本患者はBMI32と肥満であった。糖尿病既往のない患者においても、高血糖時には1型糖尿病を念頭に置いた診察の重要性を改めて認識した。

8) 地方都市の健診受診者における30年間の男性痛風頻度の経年推移

鳥取赤十字病院検査科 しお 塩 ひろし 宏

目的：厚生労働省の国民生活基礎調査によると、2010年に「痛風で通院中」と答えた人は全国で95万7千人。1986年の25万4千人から4倍近くまで増加した。その大半は男性だ。若年化も進む。そこで、30年間の痛風の頻度の経年推移、その原因について検討した。対象と方法：当院健診男性受診者のうち、血清尿酸値を測定したS56(1981)年1,064名、S62・63(1987・88)年2,668名、H4(1992)年2,072名、H22(2010)年3,034名を対象とした。血清尿酸はウリカーゼ・ペロキシダーゼ法にて測定した。痛風の診断は1977年アメリカリウマチ学会の痛風の診断基準を用いた。結果：1. 約30年間で痛風の頻度は、0.18%→0.26%→0.62%→1.0%以上と経年的に5倍以上に増加した。2. 原因として肥満(主に運動不足による体脂肪増加)の増加が考えられる。結語：「1,000歩(=10分)増やす運動」を提唱したい。

5. 寄生虫疾患 10:47~11:05 座長 矢崎 誠一(ふれあいクリニックやぎ)

9) 8年間移動性皮下腫瘍が出没し、血清学的検査にて診断した顎口虫症の1例

博愛病院内科 ながはら 永原 らん 蘭 福嶋 祐子 大谷 英之
松本 栄二 足立 晶子 田中 保則
竹内 龍男 重白 啓司 堀 立明
浜本 哲郎 鶴原 一郎 周防 武昭

症例は50歳代の日本人男性。8年前にタイに渡航した時に魚介類の生食を行っている。帰国後、年に3~4回頬部、手背、口唇、舌、臀部に移動性の限局性皮下腫瘍が出現した。近医受診するも診断がつかず、疼痛、発熱はなく、腫瘍は2~3日で消失するので放置していた。2013年2月に当院内科受診した時には皮下腫瘍はなく、好酸球増多、炎症所見、便中卵はなかったが血清検査にて顎口虫に対する抗体が陽性であった。臨床像と血清反応から顎口虫症と診断してアルペンダゾールを3週間投与した。その結果、投与1年後の現在まで皮下腫瘍の出現はなく、血清抗体も陰性化した。顎口虫症の確定診断には虫体の摘出が必要と言われているが、移動が早く困難な事が多いので、本例のように血清学的診断は有用である。

10) 内視鏡的に虫体を摘出した肝蛭症の1例

山陰労災病院消化器内科 角田 宏明 山下 太郎 向山 智之
 神戸 貴雅 西向 栄治 前田 直人
 謝花 典子 岸本 幸廣 古城 治彦
 鳥取大学医学部医動物学分野 大槻 均 福本 宗嗣

今回われわれは内視鏡的に摘出した肝蛭症の1例を経験したので、若干の文献的考察を交えて報告する。症例：60歳代女性。主訴：上腹部痛。生活歴：自宅敷地内にウシ4頭を飼育。現病歴：平成23年1月中旬、上腹部痛のため近医で点滴をされ痛みは消失した。後日黄疸が出現し、発症から1週間後に紹介入院となった。入院時現症：眼球結膜に軽度黄疸あり。腹部に圧痛や筋性防御はなかった。検査所見：入院時血液検査：肝・胆道系酵素上昇および軽度黄疸を認めたが、炎症所見はなかった。好酸球増多（Eo 10.7%）あり。腹部造影CT：肝ドーム下に数珠状に連なる乏血性腫瘤を認めた。DIC-CT：下部総胆管に膜様欠損を認めた。ERCP：胆管造影で総胆管内に欠損影があり、乳頭切開の後に摘出したところ、20×10mm大の扁平型の虫体であった。鳥取大学医学部医学科医動物学分野で「肝蛭」と診断された。

6. 血液・免疫疾患 11：05～11：23 座長 川谷 俊夫（かわたに医院）

11) 肺炎，敗血症よりDICを生じた症例

老人保健施設ふたば 特定医療法人新生病院（長野県）内科 杉山 将洋

低ナトリウム血症にて、他院より紹介となった患者が高熱を生じ、肺炎の所見にて加療中、血液培養より、St. aureusを検出し、DICの所見を示し、MOFの状態を呈したが原則通り、抗生剤を種々投与しながら、合成プロテアーゼ阻害薬を静注し、小康得た。脳梗塞の所見より食思不振が続き、低栄養、低アルブミン血症を呈した。鼻腔より注入食と経口摂取の試みに、誤嚥性肺炎の再発を懸念し、家人の強い延命希望もあって、PEG造設を行い、治療を続けたが慢性の下痢、十二指腸潰瘍による出血性貧血を併発した。服薬と食事形態の工夫にて、漸次回復、退院し家庭療法、在宅管理となった症例につき、検討を加えて報告する。

12) Castleman病類似型IgG4関連疾患の1例

鳥取県立中央病院総合診療科，血液内科 橋本 由徳 志賀 純子
 同 総合診療科 岡本 勝
 同 血液内科 小村 裕美 田中 孝幸 日野 理彦
 同 病理診断科・臨床検査科 中本 周

症例は60歳代女性。倦怠感あり近医を受診したところ貧血を指摘され総合病院紹介となった。同病院で消化管精査を受けるも明らかな異常なし。体幹部CT検査にて両側腋窩、腹腔内、両側鼠径部のリンパ節腫大を認め悪性リンパ腫を疑われ当院紹介となった。種々の血液検査、腋窩リンパ節生検の結果、多中心

性Castleman病あるいはCastleman病類似型IgG4関連疾患と考えられた。中等量のステロイド治療が著効しており経過は良好である。IgG4関連疾患は、21世紀に入り日本から発信された疾患で、高IgG4血症と全身諸臓器におけるIgG4陽性形質細胞増加によるさまざまな徴候を呈するリンパ増殖性疾患である。厚生労働省の研究班からIgG4関連疾患包括診断基準2011が公表され、急速に認識が広まってきている。病因病態にまだ不明な点があり、鑑別診断との異同も未解決な部分があるが、多彩な臨床像を呈し、日常診療で遭遇する機会があるため本疾患の想起が重要である。

7. 在宅医療・介護 11:23~11:41 座長 寶意 規嗣 (宝意内科医院)

13) 老健入所死亡例における性差

米子市 真誠会セントラルクリニック なかしたえいのすけ 中下英之助 小田 貢

高齢化社会の進行により施設入所者の要介護度も増して、介護老人保健施設（老健）入所者の死亡例が増加している。老健死亡例の死亡場所、年齢、性別、死因、性差について検討した。対象は平成20年から平成25年の6年間に老健ゆうとぴあ入所者（紹介先病院転出例を含む）の死亡例180人である。内訳は男性74人、平均年齢84.8歳、女性106人、平均年齢88.5歳。死亡場所は老健ゆうとぴあ123人（68.3%）、真誠会セントラルクリニック29人（16.1%）、病院26人（14.4%）、在宅など2人（1.1%）。死亡原因は老衰59人（32.7%）、肺炎31人（17.2%）、心不全7人（3.9%）、悪性腫瘍29人（16.1%）、透析関連41人（22.8%）、その他13人（7.2%）。性別でみると女性では老衰が多く、男性では肺炎、悪性腫瘍、透析関連での死亡が多い。年度別、年齢別では男性入所者の死亡比率が高かった。

14) 鳥取県西部医師会の「在宅医療」の取り組み 現状と課題

鳥取県西部医師会 のざか よしひと 野坂 美仁

少子高齢化の進む日本において、国は医療の進むべき方向を「在宅医療」への方向転換をすすめている。西部医師会は平成23年より開業医だけでなく勤務医や看護師、行政などに参加して頂いて在宅医療推進委員会を設置し、鳥取県西部地域における在宅医療の現状と課題について取り組んでいる。医師会が主体となって在宅医療を推進する上での現状と課題について報告する。

特 別 講 演

11:50~12:50 座 長 大野 耕策 (山陰労災病院院長)

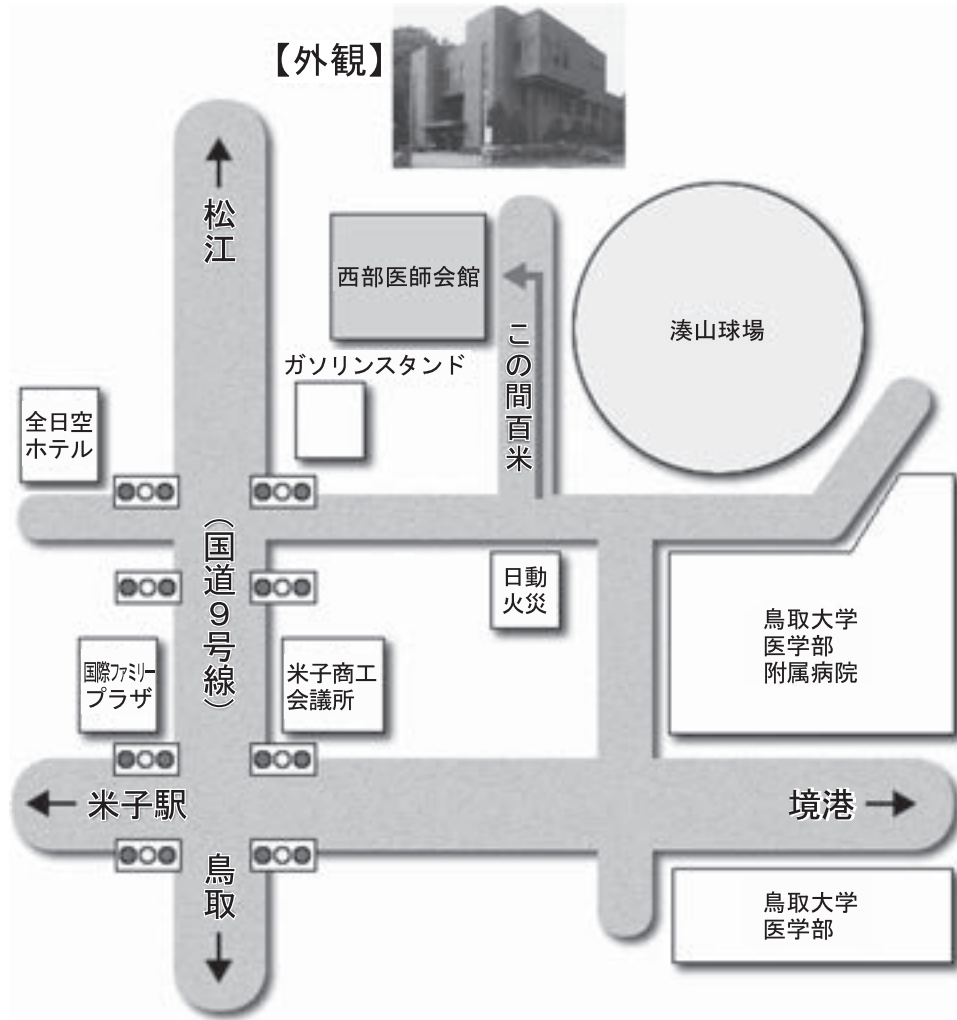
「三大肝炎と肝癌」

鳥取大学医学部統合内科医学講座・機能病態内科学 (消化器内科)

教授 村 脇 義 和 先生

わが国では、肝癌による死亡数は減少傾向にあるが、それでも悪性腫瘍の第4位を占め年間約3万人が亡くなっている。肝癌は他の癌種と異なり、肝発癌高危険群が絞り込める特徴がある。すなわち、肝癌は正常肝に発症することはまれで、慢性肝疾患特に肝硬変に発症する。わが国の慢性肝疾患はB型・C型肝炎ウイルスによるものが大部分を占めている。従ってB型・C型肝炎ウイルス検診を行い、早期に感染者を見つけて適切な治療を行うと肝病変進展や肝発癌を抑制することが出来る。加えて、感染者を定期的に診察し (サーベイランス)、根治可能な早期に肝癌を見つけると、肝癌による死亡を無くすることが出来る。ただ、肝炎ウイルス検診の受診者が少ないこと、更には肝炎ウイルス以外の過栄養・糖尿病・過剰飲酒などによる脂肪肝炎～肝硬変での肝癌発症例が最近増加している問題がある。この対策として、手術前・妊娠出産時・献血時・癌化学療法・免疫療法・分子標的治療での非認識受検の肝炎ウイルス検査利用、糖尿病専門医・精神科医との連携などの取り組みが行われている。本講演ではB型肝炎・C型肝炎・脂肪肝炎の三大肝炎の現況および肝発癌との関連を概説し、各診療科の先生に三大肝炎を理解して頂き、肝発癌高危険群の発見・肝癌死亡減少に繋がればと思っている。

鳥取県西部医師会館案内図



鳥取県医師会報の全文は、鳥取県医師会ホームページでもご覧頂けます。

<http://www.tottori/med.or.jp/>

鳥取県医師会報 付録・平成26年5月15日発行

会報編集委員会：渡辺 憲・米川正夫・武信順子・辻田哲朗・秋藤洋一・中安弘幸・久代昌彦

・発行者 公益社団法人 鳥取県医師会 ・編集発行人 魚谷 純 ・印刷 勝美印刷(株)

〒680-8585 鳥取市戎町317番地 TEL 0857-27-5566 FAX 0857-29-1578

〒682-0722 東伯郡湯梨浜町はかい長瀬818-1

E-mail: kenishikai@tottori.med.or.jp URL: <http://www.tottori.med.or.jp/>

定価 1部500円(但し、本会会員の購読料は会費に含まれています)



URL : <http://www.tottori.med.or.jp/>